

〈関連年表〉

	全国のできごと	周辺のできごと	周辺の遺跡・文化財
13,000年前	旧石器 ・氷河期、日本列島と大陸が陸続き	・人の生活の痕跡が見られるようになる	・鷲羽山遺跡（倉敷市）
	縄文 ・氷河期が終わり、暖かくなる ・土器づくりが始まる	・高梁川の沖積平野縁辺に貝塚がつくられる	・里木貝塚（倉敷市） ・津雲貝塚（笠岡市）
2,000年前	弥生 ・米づくりが始まる ・金属器が伝わる ・卑弥呼が魏に使いを送る（239）	・足守川流域で大規模な集落が営まれる ・足守川流域、真備地域で墳丘墓がつくられる	・酒津貝塚（倉敷市） ・上東遺跡（倉敷市） ・楯築墳丘墓（倉敷市） ・宮山墳丘墓（総社市）
1,500年前	古墳 ・前方後円墳がつくられはじめる ・倭の五王の時代 ・仏教が伝わる（538）	・吉備で巨大前方後円墳がつくられる ・八幡山周辺で古墳群がつくられる	・造山古墳（岡山市） ・作山古墳（総社市） ・天狗山古墳（倉敷市） ・二万大塚古墳（倉敷市）
	奈良 ・平城京に都が移る（710） ・国分寺建立の詔（741） ・東大寺の大仏完成（752）	・小田川沿いに古代山陽道が整備される ・吉備真備が活躍する	・備中国分寺跡（総社市） ・備中国分尼寺跡（総社市）
1,000年前	平安 ・平安京に都が移る（794） ・院政の開始（1086） ・源平の争乱（1180～1185）	・酒津八幡神社創建（947） ・水島・藤戸合戦（1184）	・安養寺裏山経塚群（倉敷市）
	鎌倉 ・源頼朝が征夷大将軍になる（1192） ・蒙古襲来（1274、1281）	・玉島で亀山焼がつくられ始める ・一遍上人が軽部宿を訪れる（1287）	・堂応寺宝篋印塔（倉敷市）
500年前	室町 ・足利尊氏が幕府を開く（1338） ・応仁の乱（1467～1477） ・本能寺の変（1582）	・備中高松城水攻め（1582） ・高梁川で高瀬舟を用いた水運が始まる（16世紀末）	・梁場山城跡（倉敷市） ・青江城跡（倉敷市） ・南山城跡（倉敷市）
	江戸 ・徳川家康が幕府を開く（1603） ・大政奉還（1867）	・船穂・玉島間で「高瀬通し」が開通する（17世紀後半） ・鉄穴流しによる高梁川の水質汚染が問題となる	・一の口水門（倉敷市） ・岡田藩陣屋跡（倉敷市）
100年前	明治～現代 ・明治天皇即位（1868） ・第一次世界大戦始まる（1914） ・第二次世界大戦始まる（1939）	・高梁川の河川改修工事が完了、現在の流れになる（1925）	・高梁川東西用水取配水施設（倉敷市）

酒津遺跡の時期

※資料の転載・引用はご遠慮ください。

岡山県古代吉備文化財センター

〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3

TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142

https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/



酒津遺跡現地説明会資料

日程：令和6年2月24日（土）主催：岡山県古代吉備文化財センター
場所：倉敷市酒津地先 酒津遺跡発掘調査現場

岡山県古代吉備文化財センターでは、高梁川河川整備事業に伴い令和4年度から酒津遺跡の発掘調査を行っています。

酒津遺跡は、倉敷市街地の北西にある酒津八幡山の麓に位置します。かつての高梁川は、八幡山の北側で東西に分かれており、東高梁川と八幡山の間には本遺跡が立地していました。しかし、明治時代になると高梁川下流域で氾濫が多発したため、川の流れを1本にする改修工事が行われました。工事の結果、遺跡の大部分が河川敷となり、現在に至ります。

酒津遺跡は昭和30年に発見されて以来、川の底から多数の遺物が見つかることで広く知られるようになりました。中でも、弥生時代後期末の土器は「酒津式土器」と名付けられ、備中南部の同時期を代表する土器として学術的にも有名です。しかし、これまで本格的な発掘調査はほとんど行われてこなかったため、どのような遺跡なのかはまだ明らかになっていません。

今年度は、笠井堰の南に位置する中州の北側を調査し、弥生時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が見つかりました。



第1図 酒津遺跡と周辺の主な遺跡（1/50,000）（国土地理院電子地形図を加工）



はこしきせつかん
①箱式石棺 (北西から撮影)

時期：古墳時代中期

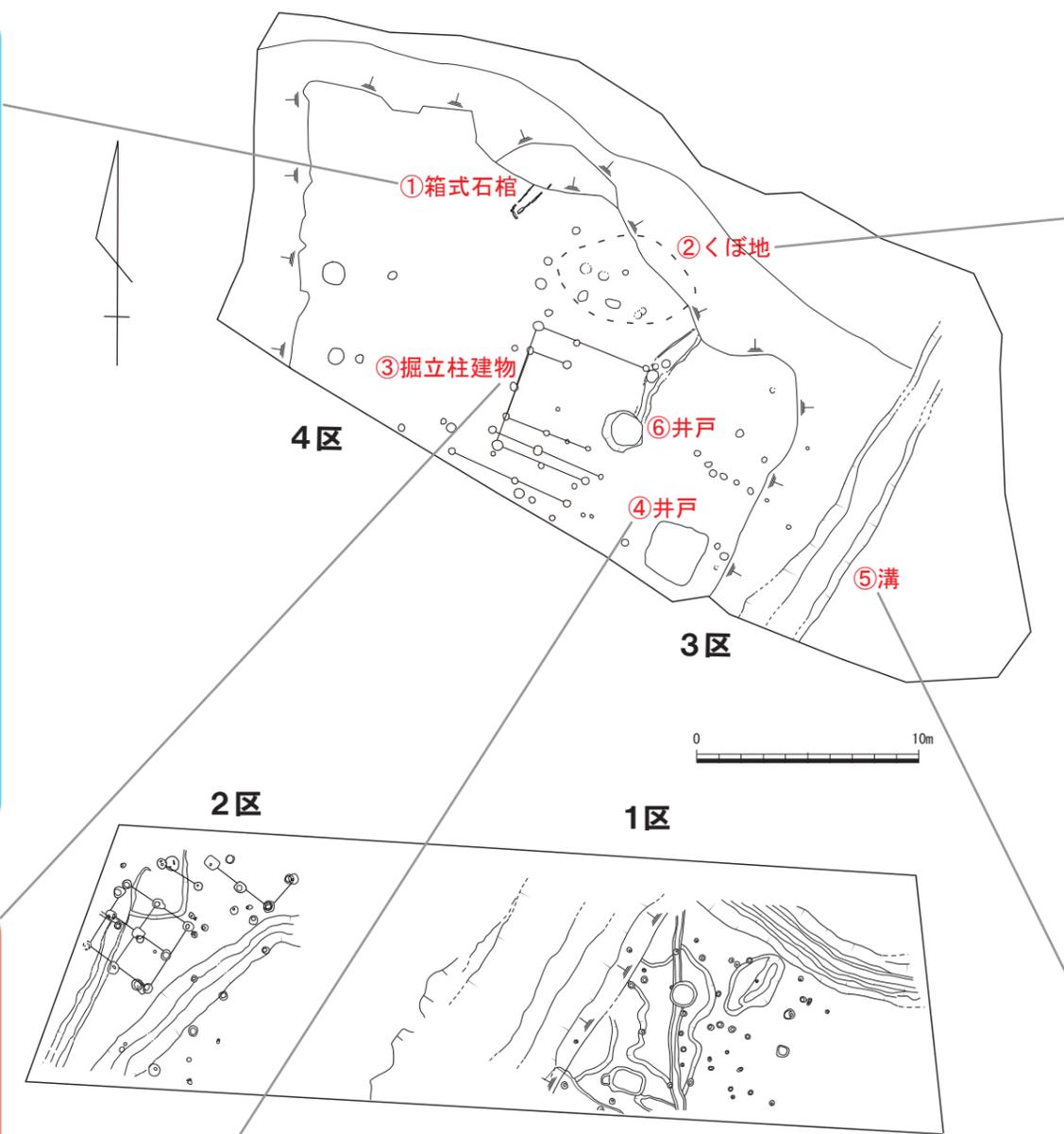
板状の石を並べて囲った棺で、全長約210cm、最大幅は約50cmです。棺の中からは、被葬者の下半身を中心とした骨が見つかりました。また、鉄製の矢じりや鎌のほか、鹿の角を加工した装具を持つ大刀が見つかりました。



ほったてはしらたてもの
③掘立柱建物 (東から撮影)

時期：室町時代

全長約6m×6mの建物です。柱穴からは、瓦質土器などが見つかりました。近い時期に建てられた掘立柱建物が、同じ場所で向きが揃った状態で見つかったことから、建て替えが行われた可能性が考えられます。



第2図 酒津遺跡調査区全体図 (1/300)

④井戸

時期：鎌倉時代以降

内側約1.2m×1m、深さ1.6mの方形の石組みの井戸です。上部の石は、使われなくなった後に土師質の椀や皿とともに井戸の中に投げ込まれていました。



(南西から撮影)



②くぼ地 (北から撮影)

時期：古墳時代後期

広い範囲が緩やかにくぼんでおり、炭を含んだ土が溜まっていた。東側では小さな河原石と共に製塩土器、須恵器、羽口、土錘、焼土、ガラス玉、鉄器、鉄滓、スッポンの骨といった多様な遺物が見つかり、この付近で鍛冶や製塩作業が行われた可能性が考えられます。



⑤溝 (南西から撮影)

時期：奈良時代

3区から1区にかけて伸びており、幅約7m、深さ約2m、長さは40m以上になります。溝の中からは、土師器、須恵器、瓦などが見つかりました。